

老健 ほっかいどう

一般社団法人北海道老人保健施設協議会

臨時
増刊号

2022年12月



初 会員アンケート実施!

「老健ほっかいどう」満足度調査&経営状況について聞きました

CONTENTS

02 会員アンケート結果

05 第33回全国介護老人保健施設大会 兵庫

06 第29回北海道老人保健施設大会

08 道老健TOPICS / 事務局通信

北海道老人保健施設協議会

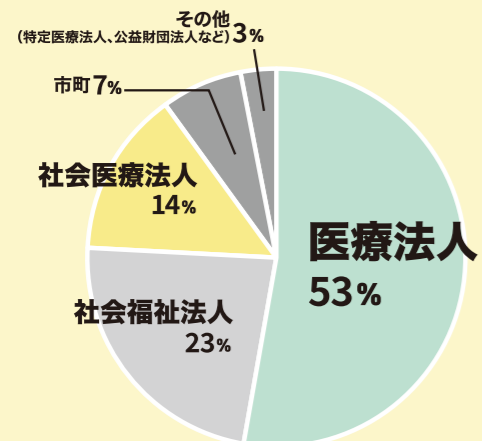
会員アンケート

北海道老人保健施設協議会の機関誌として、2017年1月に創刊した『老健ほっかいどう』。創刊から6年目を迎え、この度初めて、会員の皆さまの満足度調査を目的としたアンケート調査を行いました。本誌が、皆さまのお手元でいかに読んで活用され、役立つ一冊になっているのか。はたまた、いまだ存在すら知られていないのか……。各施設の経営状況等もあわせて、結果をご紹介します。



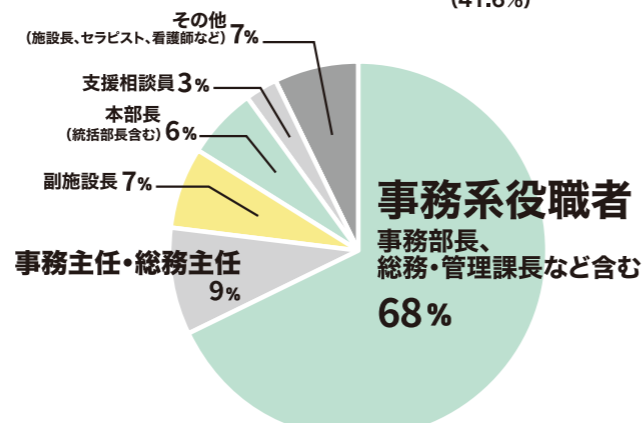
会員施設のプロフィール

北海道老人保健施設協議会
会員施設数 **166**
(2022.12月時点)



老健施設についてお聞きました。

本アンケートに回答いただいた方の
職種・役職 **N数=69人**
(41.6%)

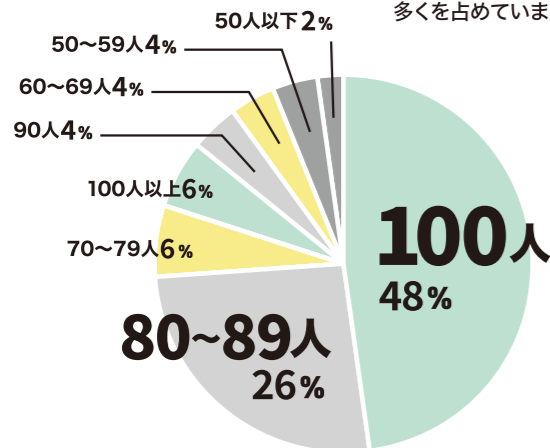


年末のお忙しいなかご協力いただいた皆さま、誠にありがとうございました！次回以降は、より多くの皆さまにご協力いただけるような情報発信をしていきます。

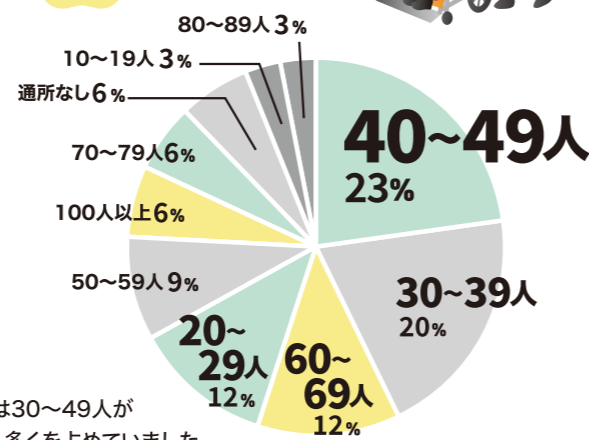
定員規模

Q1 入所定員数

入所定員は、100人が最も多く、次いで80~89人が多くを占めていました。

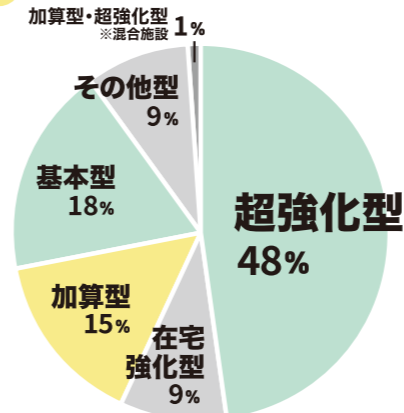


Q2 通所定員数



通所定員は30~49人が約4割と最も多くを占めていました。一方、通所は実施していない施設も数件ありました。また理由は不明ですが、現在休止中の老健施設も3件ほどありました。

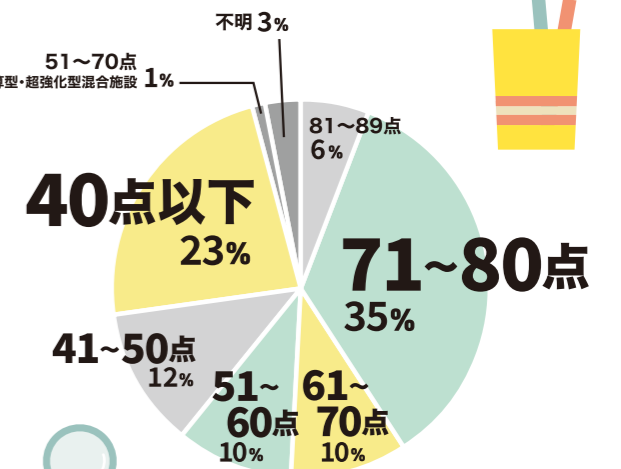
Q3 施設類型(基本報酬)



報酬体系は、超強化型および在宅強化型をあわせると約57%。半数を超える老健施設が在宅復帰・在宅療養支援に取り組んでいる結果となりました。

一方、基本型が18%、その他型は9%となりました。地域によってはほかに介護施設がないといった事情はあると思いますが、老健施設の役割を発揮するためにも加算型以上となる取り組みが期待されます。

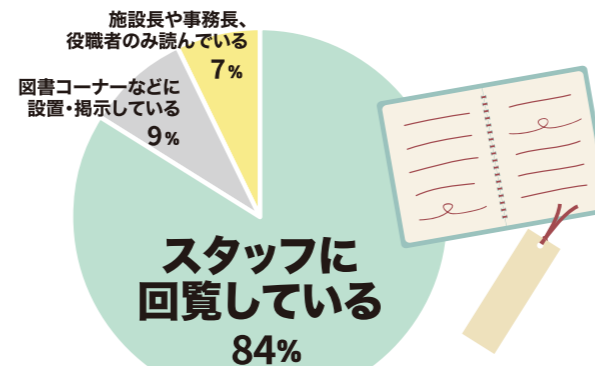
Q4 直近の在宅復帰・在宅療養支援機能等指標の点数



在宅復帰・在宅療養支援機能に対する評価の算定要件の一つとなる、在宅復帰・在宅療養支援機能等指標。強化型の要件となる70点以上を算定する老健施設は、約4割となりました。

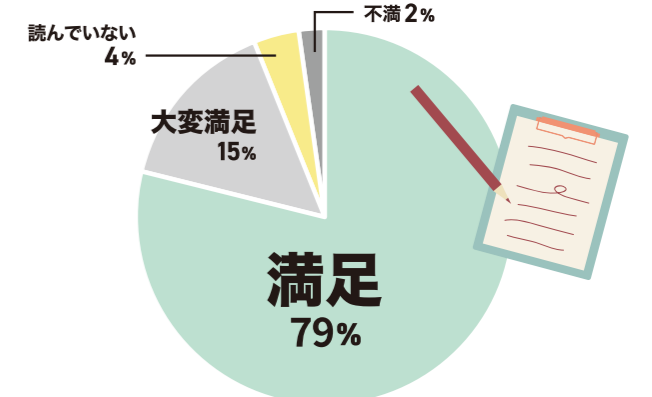
『老健ほっかいどう』についてお聞きました

Q5 誰がどのように読んでいますか



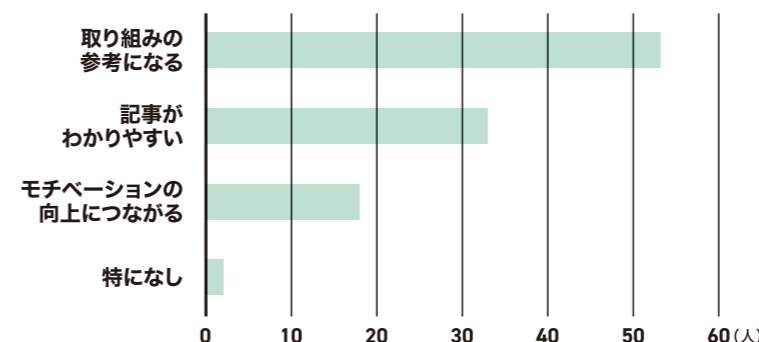
全職員に回覧している施設が84%と大半となりました。これはうれしい結果です。皆さんに満足いただけるような誌面づくりに励みます。

Q6 内容の満足度を教えてください



皆さん、おおむね満足いただけているようでホッとひと安心(気遣いでは?という声もチラホラ……。その一方で、「読んでいない」という回答もあり、配布方法や内容の検討が必要と考えています。

Q7 大変満足・満足の理由

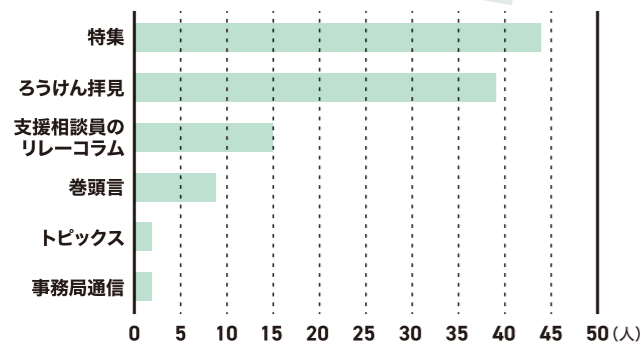


Q8 不満の理由

参考にならない

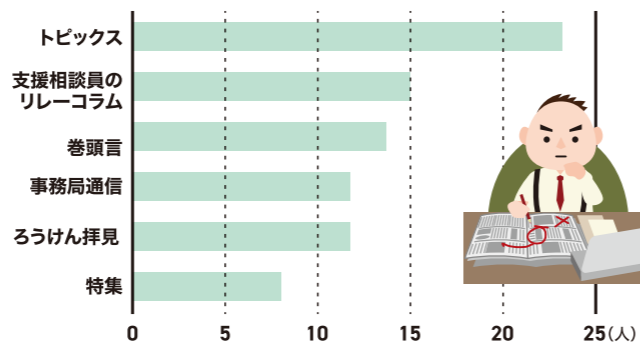
満足の理由で最も多かったのは、施設運営や活動の参考にさせていただいているとの声。対して不満を選んだ理由は、「参考にならない」という結果に。

Q9 好きなコーナー



旬の話題や関心の高いテーマに沿った「特集」コーナー、各老健施設の取り組みを知ることができる「ろうけん拝見」が人気を集めました。

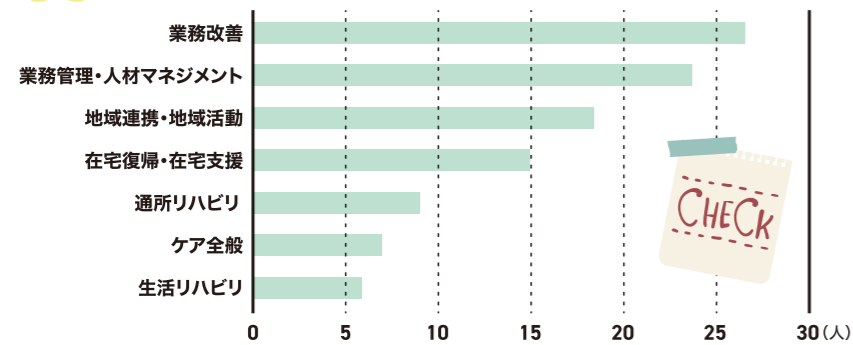
Q10 改善が必要なコーナー



「満足」と答えた方も含め、あえて改善点をお聞きしたところ「トピックス」が票を集めました。もっと話題性の高い情報提供が求められているようです。



Q11 今後、読みたいテーマは何ですか



最も多かったのは「業務改善」、次いで「業務管理・人材マネジメント」が続きました。回答者が、これらを担うことの多い事務長職が最も多かったことも関係すると思われます。

また、コロナ禍で停滞傾向にある「地域連携・地域活動」も関心が高いことがわかります。このほか、「設備投資や光熱費のやりくり」「各施設の特徴を知りたい」といった声も聞かれました。



Q12 本誌で今後取り上げてほしいテーマ、本誌へのご要望・ご意見があれば教えてください



皆さん、ご協力ありがとうございました！
貴重なご意見を参考に、
これからも役に立つ機関誌制作に取り組みます。
今後も『老健ほっかいどう』をよろしくお願いいたします！



REPORT 1

第33回

全国介護老人保健施設大会 兵庫 開催

新たな時代をいきぬくために ～今、老健ができること～

9月22日(木)・23日(金)、「第33回全国介護老人保健施設大会 兵庫」が、会場およびWeb参加のハイブリッド方式で開催されました。第31回の宮城大会、第32回の岐阜大会がコロナ禍により中止となり、3年振りの全国大会となった本大会。新型コロナウイルス感染症や科学的介護情報システム(LIFE)の活用のほか、自立支援や転倒防止など、これまで以上に多彩なテーマを掲げたパネルディスカッションや講演が充実した大会となりました。

当協会から参加した事務連会長の藤井徹也さんに、印象に残った講演について紹介していただきます。

ご挨拶 全国老人保健施設協会 東 憲太郎会長

やっと全国大会が開催できて感無量。本大会はいわゆる学会とは性格が異なり、全国の老健職員が一堂に会して日頃の苦労話や意見交換などを行い、元気になってそれぞれの老健施設に帰っていただくことに意義があります。コロナだけでなく物価高や災害への備えなど課題は多くありますが、各団体とも連携を深めて取り組んでいきましょう。



PickUp

自己と組織の育成法: 梨田流コミュニケーション術

野球評論家 梨田 昌孝氏

前半、新型コロナウイルス感染症に罹患し、生死をさまよった経験を生々しく語った梨田昌孝氏。15日間に及ぶ集中治療室での生活によって20kg近く体重が減り、筋肉も落ちたものの、リハビリに取り組んだことで罹患前を上回るまで体力が回復したと説明しました。

後半では、自身が歩んできたプロ野球人生を振り返った梨田氏。代名詞ともなった「こんにやく打法」誕生秘話や野村克也監督との交流、「世界の盗塁王」と

呼ばれた福本豊選手の攻略法など次々とエピソードを披露しました。そのなかで自己や組織を成長させるために大切なこととして、「逆転の発想」「相手の想像を超える準備」「課題解決には3つ程度の方策を用意しておくこと」など、具体的なアドバイスを送りました。

途中、参加者の一人を壇上に上げてキャッチボールも行うなど、会場を大いに沸かせました。



PickUp

教育講演II 新たな時代を生き抜くために ～地域包括ケアの中核施設としての老健～

産業医科大学医学部 公衆衛生学教授 松田 晋哉氏

講演のなかで、今後10年間は地域包括ケアシステムの具体化が課題になると述べた松田教授。そこで老健は、医療・介護サービスを包括的に提供する「地域包括ケアステーション」としての機能を発揮する必要があると強調しました。



老健が地域包括ケアステーションになるために必要なこと

Point 1 入院と在宅のケアニーズのギャップを埋める

病院は平均在院日数短縮を推進するが、退院するにはケアやリハビリニーズが高い患者が多い。ここに老健が介入し、在宅支援までをしっかり担う必要がある。

Point 2 口腔ケアの推進

定期的に歯科受診で口腔ケアを行っている人は、肺炎になる確率が減少。退所後も在宅支援のなかでフォローし、肺炎を予防する。

Point 3 栄養管理でフレイルを予防

高齢期におけるQOL向上には栄養サポートとリハビリが不可欠。科学的介護情報システム(LIFE)を活用したうえで、具体的なプログラムを策定することが重要。

Point 4 ソーシャライゼーション(社会化)

ヨーロッパに見られる高齢者施設のように、施設内にレストランや美容院などを構えるなど、地域住民が気軽に訪れる場所となること。



北海道老人保健施設協会 事務連会長 藤井 徹也さん

新しい老健を皆さんで目指しましょう!

3年振りに参加し、改めて全国大会の楽しさを実感しました。梨田さんのユーモア溢れるトークには、人や組織が成長するヒントが随所に隠れていました。松田先生の講演では、他国の高齢者施設の先進事例に刺激を受けました。しがらみの少ない北海道は、地域包括ケアステーションの実現にはもってこいの場所だと思います。皆さんで新しい老健を目指しましょう!



開会挨拶

会長 星野 豊氏
北海道老人保健施設協議会

残念ながらいまだコロナ禍から回復の兆しが見えず、皆さん緊張した日々が続いていると思います。コロナ禍はまだしばらく継続すると思われていますが、一方で忘れてならないのは、すでに人生は100年時代へと突入しているという点です。それは高齢になっても、

地域でいかに楽しみを持って暮らしていくかが問われているとも言え、老健は今まで以上に地域を支えていく使命を任せられていることを意味しています。本大会が会員の皆さんに厳しい状況を乗り越えられるヒントとエネルギーとなることを願っています。

基調講演 LIFEによる科学的介護を見据えて～信頼される老健を、地域へ～

東 憲太郎氏 公益社団法人全国老人保健施設協会 会長

Point 1

- 老健は科学的介護情報システム(LIFE)の算定状況が高い
- 超強化型老健は、科学的介護推進体制加算や自立支援促進加算の算定率が高い
- 課題は算定にあたっての入力負担や体制構築

LIFEは今後も介護における全サービスの運営基準に定められている。空欄があっても気にせず、まずはトライすることが大切です!

Point 2

- 介助量での評価や評価者の主観で偏りが生じやすいバーセル・インデックス(Barthel Index)は課題あり
- 2010年に全老健が開発したICFステージングは残存機能を評価し、社会参加の評価もできるところがカギ
- 超強化型や在宅強化型老健はADL評価にICFステージングを活用している割合が高い



ゆくゆくはICFステージングが加算化される可能性が高い。早めにICFステージングあるいはRISシステムの活用に進んでほしい!また、地域医療介護総合確保基金の補助金等を活用し、早々にデジタル化にも取り組みましょう

REPORT 2

第29回 北海道老人保健施設大会

信頼される老健を、地域へ～老健は地域の医療・介護をつなぐ～



特別講演

科学的介護の誤解と錯覚を解いて、介護現場を大革命させる

谷本 正徳氏 ポスト・ヒューマン・ジャパン株式会社 代表取締役

科学的介護情報システム(LIFE)には、いくつかの誤解と錯覚があると述べたのは谷本正徳氏です。その理由について、「LIFEに情報を提出し、加算を算定しているだけでは実践しているとは言えない。どれだけの利用者が自立したか、BPSDが消失傾向にあるかアウトカムがすべて」と説明。そのうえで、「経営者や管理者が意識を変革するだけでなく、自ら科学的介護について学び、職員教育に投資する必要がある」と強調しました。

次に、科学的介護に真剣に取り組むためには、組織風土改革さらにはリスキリング(学び直し)の必要性を訴えました。これが最も必要となるのは、経営者であると訴え、「特に介護倫理や組織心理学に基づく科学的マネ

ジメントをしっかり学び、現場の理解を得てほしい」と説明。続いて、介護職にも高齢者生理学の知識の獲得が、看護職についても「安全至上主義の医療視点よりも、リスクにともなう不利益を考慮したマネジメントの発揮」が必要であると説きました。

そして老健で科学的介護を実現するには「心・技・体」が求められると述べた谷本氏。「心」では多様な介護倫理、「技」では組織心理学や行動経済学理論、「体」においては、水分ケアや排せつ自立ケアといったケア習慣についての学びの重要性を指摘。「老健が国民の尊厳を守りきるための最後の要塞となってほしい」と呼びかけました。

Point 1

LIFE算定=科学的介護の実践とは言い難い。いかにアウトカムを導くかが求められる

Point 2

経営者や管理者が、率先して科学的介護についてリスキリングを行うべし!



特別講演

高齢者ケアに携わる君たちへ～多職種協働による強みをどのように地域へ～

齊藤 正身氏 医療法人真正会 理事長

埼玉県川越市で病院や特別養護老人ホームなどを展開する、かすみケアグループの理事長を務める齊藤正身氏。講演では自著『医療・介護に携わる君たちへ』の中から、現場で働く職員に向けていくつかのメッセージを紹介しました。

まず、介護の仕事に向いていないと悩んだときには、原点に立ち返ることをアドバイスした齊藤氏。「誰かの役に立ちたい」といった純粋な思いが、この仕事を選んだ出発点である人は多いはず。介護保険制度のなかで仕事をしていると忘れがちになるが、そういう思いが目の前の利用者や向き合う際に大切になってくる。そこからインフォーマルなサービスなどのアイデアにつながることもある」と述べました。

また、老健にとって不可欠な在宅支援での具体的なケアのポイントとして、端座位の重要性を指摘。「急性期であろうと慢性期であろうと、まずは端座位を取れることが大事。ケアプランにも落とし込んで長い目で取り組んでいくことで、寝たきりも防ぐことができる」と説明しました。

他方で、齊藤氏は海外の高齢者施設やケアにおける参考事例も紹介。認知症高齢者が夕方から夜にかけて生じる不穏状態への対応として、環境への配慮が有効だと指摘しました。「たとえば利用者さんが食堂で夕食をとっている間に、照明を温かい色に変えるなど環境の調整が効果的になってくる。ほかにも、オーストラリアのようにアセスメント

にはネガティブな要因だけでなく、その人の長所を探してみてもいい」と呼びかけました。

最後、高齢者ケアは広義のターミナルケアであるとし、「利用者さんにとってのコミュニケーションや目的のある生活を大事にしつつ、見守る側となって支援し続けてほしい」と語りました。

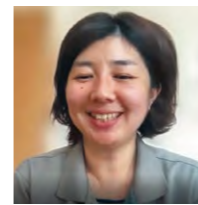
Point 1

悩んだら初心に帰る。ときには介護保険制度を離れ、幅広い視点を持って利用者に向き合おう

Point 2

私たちが利用者を見守る存在となり、密なコミュニケーションと目的のある生活を送ることができるようケアを提供しよう

2022年10月31日(月)～11月14日(月)、第29回北海道老人保健施設大会がオンデマンド形式で開催されました。誌面では多彩な講師陣が登場した基調講演と特別講演の内容を振り返ります。



特別講演

テクノロジーで誰もが介護したくなる社会を目指して

宇井 吉美氏 株式会社aba 代表取締役

ケアテックカンパニーであるabaの理念は、「テクノロジーで誰もが介護できるだけでなく、したくなる介護を目指す」。学生時代に起業した宇井氏は、うつ病になった祖母の介護で介護者の負担を経験したことや、祖母自身も今という「ヤングケアラー」・「ワンオペ育児」・「ワーキングママ」であり、孫である宇井氏の育児も担ってきた支援者であったことが背景にあると語りました。

理念実現を目指し、完成させたのがベッドに敷くだけで排せつを検知できる「Helppad(ヘルプパッド)」。宇井氏は、「おむつを替えてほしいという高齢者と、おむつを開けずに中身を見たい介護者の思いを叶えるために開発したシステム」である

と説明。これにより、適時のおむつ交換や、履歴記録で排せつタイミングを予測することでトイレ誘導が可能になり、おむつ外しにつながるという効果が出ていると報告しました。

後半は、ケアテック業界の現状や方向性についても触れながら、核となるのは「介護の理念」であると強調。「開発が難しいシート型センサーにこだわったのは、『高齢者の身体に機械を着けないで』という現場職員さんの声があったから。介護における温かさやおもてなしの心は、日本が誇るべき部分。そのためケアテックに介護の理念はなくしたくないし、他国に負けたくないところ」と力を込めました。

最後に宇井氏は、「Deploy or Die(世の中に広げられないなら死んでしまえ)」と決意を述べ、「当たり前のようにヘルプパッドが使われるようになってこそ研究が完成する。多くの人に届けていきたい」と締めくくりました。

Point 1

ケアテックの核となるのは、「介護の理念」

Point 2

ヘルプパッドが介護現場で当たり前のように使われる未来を目指す



攻めのコロナ対策で 利用者の幸せを守ろう

重症化させない準備を万端に

当協会は、2022年10月29日(土)、昨年、一昨年に続き塚本容子氏(北海道医療大学看護福祉学部教授)を講師に迎えたリーダー研修を、オンライン配信で開催しました。3回目となる本研修のテーマは、「高齢者施設におけるこれからの新型コロナウィルス感染対策～守るだけではなく攻めの感染対策～」。

塚本氏は冒頭で、「もう守るだけでは不十分。ステップアップの意味を込めて攻めの感染対策を考えていきたい」と述べました。はじめに、現在の感染状況と1、2カ月先の感染予測を説明。インフルエンザとの同時流行も想定されるため、早期に両方のワクチン接種を推奨しました。「これからまたどこかの国で変異ウィルスが出現する可能性は大いにある。ワクチン接種をすることで、重症化予防や他者への感染を防ぐことが出来るといわれている。自分のため、人のために接種してほしい」と呼びかけました。

次に、老健職員として取り組むべきは「重症者を出さないこと」と塚本氏。そのための準備として、①利用者・職員の重症化リスクを知ること、②かかり付け医との取り決め、③発熱者が発生したときの対応をシミュレーションしておく、④体調把握の準備——を挙げました。

流行が予測されているBQ.1等のオミクロン株の新たな変異株における重症化のリスク要因は、「ワクチン未接種で一度も感染していない人」、「65歳以上で基礎疾患がひとつ以上ある人」の危険性を指摘しました。

免疫力アップとフレイル予防に前向きに取り組んで

続いて、攻めの感染対策について解説しました。職員も利用者も含め、まずは3度のワクチン接種が前提条件にあるとし、重要となるのが免疫力を高めることであると述べました。「腸には免疫細胞の70%が集まっているが、ストレスで悪玉菌が増えてしまうと機能は低下する。胃も同様に、多くの病原微生物は胃酸で死ぬが、胃薬を内服して胃酸を薄めてしまえば機能が働かなくなってしまう」と言及。重症化や死亡した人などは悪玉細菌が多いとのデータも示しながら、適切な水分や食物繊維の摂取のほか、たんぱく質の摂取と運動がフレイル予防にもなると強調しました。

ストレスを生まないもしくは軽減するには、物事を前向きに捉えることを指摘した塚本氏。「老健職員としての皆さんの目標は、コロナに感染しても重症化させず、フレイルにもさせないこと。イノベーションは、困難がなければ生まれない。利用者の幸せな生活には、皆さんの活躍が欠かせない。どうか前向きに取り組んでほしい」と締めくくりました。



参加者から多くの質問も寄せられ、その場で回答した塚本氏

事務局通信

皆様からのご意見・ご要望
お待ちしております!



日本地図を見ても一目瞭然、北海道は広いですね!道内には179市町村があり、都会もあれば自然あふれる場所もあります。それぞれの地域に老健があり、それぞれに特色があります。おのずと役に立つ情報にも違いがあると思います。今回「老健ほっかいどう」で初めて会員の皆さまにアンケートを実施しました。色々な意見を参考に、より良い誌面作りを目指し、道東に位置する老健から情報発信して行きますので、よろしく願い致します。

(医療法人社団久仁会介護老人保健施設いきいき 総務部長 奈良輝久)